

ポールの悲劇——『息子と恋人』

奥村透

ロレンスは一九二二年十一月四日付のヒズワード・ガーネット (Edward Garnett) 宛の書簡で、『息子と恋人』(Sons and Lovers, 1913)の種族や性格の差を述べている。

It follows this idea : a woman of character and refinement goes into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers—first the eldest, then the second. These sons are urged into life by their reciprocal love of their mother—urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them. It's rather like Goethe and his mother and Frau von Stein and Christiana—As soon as the young men come into contact with women, there's a split. William gives his sex to a fribble, and his mother holds his soul. But the split kills him, because he doesn't know where he is. The next son gets a woman who fights for his soul—fights his mother. The son

loves the mother—all the sons hate and are jealous of the father. The battle goes on between the mother and the girl, with the son as object. The mother gradually proves stronger, because of the tie of blood. The son decides to leave his soul in his mother's hands, and, like his elder brother, go for passion. He gets passion. Then the split begins to fall again. But, almost unconsciously, the mother realises what is the matter, and begins to die. The son casts off his mistress, attends to his mother dying. He is left in the end naked of everything, with the drift towards death.⁽¹⁾

それはつぎのような考えにもとづいて書かれています。人柄もりっぱで教養もあるひとりの女が自分より低い階級に入るが、自分の生活に満足できない。彼女は夫にはげしい情熱を持っており、子供たちは情熱から生まれたのであって、またひじょうな活力を持っている。しかし息子たちが大きくなるにつれ、彼女は彼らを恋人とみなすようになる。まず長男が選ばれ、ついで次男が対象となる。息子たちは母との相互的愛情によって、どんどんと生の世界へ駆りたてられてゆく。しかし彼らは成年に達しても恋をすることができない。彼らの生活においては母が最もつよい力であり、彼らをとらえているからである。それはゲーテとその母とフォン・スタイン夫人とクリスチャニアとの関係に似ている。若者たちが女と接するようになるや分裂が起る。ウィリアムはくだらない女に性を与えるが、魂は母に握られている。だが分裂によって彼は死ぬ。彼には自分の存在がわからないからである。つぎの息子には、彼の魂をもとめて彼の母とたたかう女ができる。息子は母を愛する。息子はすべて父を憎み、嫉妬するものである。息子を対象として、母と娘とのあいだに闘いがつづく。母は血の絆ゆえにしだいに強くなる。息子は魂を母の手にゆだね、兄とおなじく肉欲にはしろうとする。彼は肉欲をみたすが、ここでも分裂が現われはじめる。だがほとんど無意識に母は事情を悟り、死にかける。息子は女をすて瀕死の母を看病する。最後に彼はすべてを失なって、死へ漂いゆくままに残される。

この叙述は簡にして要を得て、『息子と恋人』の主題を言いつくしているといつてよい。すなわちそれは、親子二代にわたる愛における霊肉の分裂による悲劇である。いうまでもなく男女間の愛情は、霊肉両面における完全な結合のうえに成立たねばならない。そのいずれが欠けても、両者の関係には破綻がくる。そして、それは当事者のみならず、その周囲にまで不幸をもたらすのである。特に愛の充たされぬのが女のばあい、その不満は息子にたいする異常な愛情となって現われやすい。この作品では、宿命的に感じやすい感受性をもって生まれたひとりの青年が、そうした異常な関係にしばられ、母の絆と自我の独立とのあいだに苦悩する姿が描きだされる。それはただポール (Paul Morel) の悲劇であるだけでなく、作者の言うように「英国の幾千もの若者の悲劇」(“the tragedy of thousands of young men in England”⁽²⁾)であり、ひいては世界的な悲劇といえなくもない。この作品のばあいほど深刻ではなくとも、これに似た小悲劇は我々の周囲にも珍しくないからである。

『息子と恋人』は二部十五章から成り、伝統的な構成を持っている。この小説が二十世紀的であると同時に、十九世紀最後の小説といわれる所以である。第一部は悲劇の前提となる序曲であり、第二部は悲劇そのものである。第一部はほとんど忠実な作者の自伝と考えられるが、これを読むとき、この悲劇の宿命性 (inevitability) をつよく感じずにはおれない。悲劇は人間同志の葛藤によるというよりはむしろ、人間とそれを操る目にもえぬ何物かとの闘いである。ポールのばあいも、その悲劇は生まれながらに運命づけられていたといえる。彼が、肉体的には激しい情熱で結ばれながら精神的にはまったく相反する両親から、そのにがい愛憎の葛藤のうちに生まれたとき、すでに悲劇は定まっていたのである。

第一章「モレル夫妻の結婚生活」(“Married Life of the Morels”)は、中部イングランドのダービッシュ(Der-

byshire) とノッティンガムシャ (Nottinghamshire) の県境にちかいかい、ベストウッズ (Bestwood) という炭坑町の夏祭りの叙景から始まる。坑夫のウォルタ・モレル (Walter Morel) は朝はやくから家をあげ、ちかくの酒場を手伝いながら酒にありついていてる。妻のガートルード (Gertrude) はまつわりつく二人の幼児のほかに臨月の腹 (胎内) にいるのはポール) をかかえ、夫の帰りを待っている。彼女は夫に結ばれながら幻滅し、子供の成長に期待するほかは、貧と醜悪との闘いに明けくれる生活に倦みつかれている。胎内の子を生む余裕もないし、生みたくもない。まるで「生ける死骸」のようである。中部イングランドの一炭坑町の夏祭りという地方色を背景に、この悲劇の因となるモレル家の夫婦生活がきわめて象徴的に示される。

子供のときから炭坑に入った根っからの肉体労働者である夫と、ドックの技師を父にもつ中産階級出の妻とは、あらゆる面でおよそ対照的であった。たくましい肉体の夫は陽気で、あらい方言を口にし、文字は名前を書く程度にしか知らず、ダンスに巧みで、毎日の仕事あと酒場がよいを唯一の生甲斐にしている。小柄な妻はきれいな標準語をはなし、読書や知的な議論を好み、辛辣で知的な誇りを持っている。一口でいえば、前者は *sensuous* であり、後者は *spiritual* であった。そしてあるクリスマス・パーティーで出会った二人がたちまち互いにひかれたのは、前者は後者の知性的雰囲気、後者は前者の官能的魅力に、すなわち、たがいに自分にはない相手の特徴に魅せられたからである。かくて彼らは一年後のクリスマスに結婚し、六カ月ばかりはひじょうに幸福にすごす。さきあげた作者じしんの梗概にみられるごとく、またポールがのちにミリアム (Miriam Leivers) に言うように、モレル夫妻がたがいにはげしい情熱をもち、肉体的には満足をもって結ばれていたことは確かである。彼らが以後あれほどはげしい葛藤をくりかえしながら最後まで別れなかったのは、それだけ固い絆があったことを意味し、それだけに、その葛藤とそれが息子たちにおよぼした悲劇をより宿命的にしているのである。愛しながら憎まね

ばならぬ二面性にこそ彼らの悲劇があり、愛がつよければまた憎しみもはげしい道理であった。

さて、結婚後日がつにつれて性格の対立が現われてくる。妻は自分のまじめな話をうやうやしく聴いてはいるが、いっこうにわかっていない夫に失望を感じはじめ、夫はそうした機会を恐れるかのように落着かぬそぶりを示しはじめる。知性や興味のちがいから、彼らには話の共通の場がないのである。そうした二人の関係は、七カ月目に夫が妻を金銭問題で欺いていたことが発覚して決定的になる。うらぎられて自尊心を傷つけられた妻の態度は硬化する。結婚後一年にして長男ウィリアム (William) が生まれるにおよんで、はやくも妻の心は夫をはなれて子供に向う。それを嫉妬する夫はしだいに家をあげ、酒に憂さをはらすようになる。そうした夫をなじり、一家の主人としての責任をとらせようとする妻とのあいだに、「どちらかが死なぬかぎり終らぬ恐ろしい血みどろの闘い」が始まるのである。

The pity was, she was too much his opposite. She could not be content with the little he might be; she would have him the much that he ought to be. So, in seeking to make him nobler than he could be, she destroyed him. She injured and hurt and scarred herself, but she lost none of her worth. She also had the children.

遺憾なことは、彼女があまりにも彼と正反対だったことである。彼女は彼がつまらぬ人間になることに我慢がならなかつた。彼女は、彼が当然なるべきりっぱな人間になることを望んだ。かくて彼女は、彼を、彼にはなりえないりっぱな人間にしようとして破滅させたのである。彼女は自分も傷ついたけれど、自分の値うちをうしなうことはなかつた。彼女にはまた子供たちがいた。

すべては、愛しあう夫婦の性格の対立による避けがたい悲劇であった。妻の夫の個性を無視した過大な要求が彼を破滅に導くわけであるが、彼女が女らしいまじめさで一家の暮しを思い、夫の奮起向上を望んだのは無理からぬところであろう。しかしその希望が強すぎて夫の個性と能力を理解せず、その要求に寛容さを欠いたことは責められねばなるまい。また夫が妻の過大な要求に苦しめられたことは理解できるが、彼に確固たる生への信念があり、自己の途を知っておれば、かならずしも破れて酒に溺れる結果とはならなかったであろう。ロレンスの両親にたいする見方については、どちらに彼の同情が強かったかの解釈によって、多少ニュアンスのちがいはあるが、この作品の書かれたころにはどちらをも理性的に批判の眼でみるようになっていたと考えられる。しかし渦中にあった当時には、感情的にやはり母への同情が上まわっていたとみるのがほんとうであろう。

ところで、のちにロレンスが『無意識の幻想』(*Fantasia of the Unconscious*, 1927)においてつぎのようなことを述べているのは、両親および自分と母親とのあまりにも愛の絆にからまりすぎた関係への反省として興味ぶかい。すなわち、男にはこの世でなすべき使命があり、セックスは彼が仕事を終えて憩いを得、さらにつぎの仕事へむかうエネルギーを与えるものでなければならぬ。⁽⁵⁾ 男が自分の使命を忘れ、妻と家庭への奉仕にのみ甘んずるようでは、妻は男としての夫の存在にあきたらず、その不満の充足を息子に求めるようになる。母の愛にしばられた息子は、自我の独立をもとめながら果せず、異常な関係に苦しむ結果になるというのであって、明らかに両親の夫婦関係を批判したものである。またこれは『無意識の幻想』および『精神分析と無意識』(*Psychoanalysis and the Unconscious*, 1921)を一貫する考え方であるが、つぎのようにも言っている。人間の無意識の根柢には、他との結びつきをもとめる情緒的中枢 (*sympathetic solar plexus*) と、他からはなれひとりになろうとする意志的中枢 (*voluntary lumbar ganglion*) とがあって、人間が正常な意識活動を行なうためには、両者が平

衡を保つていなければならない。意志的中枢が弱くて平衡のやぶれたとき、人間は他者との関係にからまりすぎて身うごきがとれなくなる。現代の若者たちは独立すべき年齢に達したならば、断乎意志的中枢にしたがって親から離れるべきだ。そうでないかぎり現代の親子関係は改まらないというのである。これは、人間関係において自他のエゴを尊重して侵さないという彼の個人主義思想と結びつくものであろう。これらの主張がいずれも、彼じしんのくらしい過去への反省に出ていることは明らかであり、ここに過去を清算して未来をめざす、カタルシスとしての『息子と恋人』の意義があるといえるのである。

ところで、ロレンスの小説の象徴的手法はしばしば論じられるところであるが、この作品でも効果的に用いられている。たとえば長男のウイリアムが一歳のとき、夫が妻の知らぬ間に冗談に幼児の頭を丸坊主にそってしま⁽⁵⁾うが、この行為は、二人の関係に「なにか決定的なことが起った」ことを感じさせる。また、先述の夏祭りの夜、酔っぱらった夫とはげしく口論した妻が戸外へ閉めだされ、夜露の冷えが胎内の子におよぼす害をおそれながらはらわたの煮えかえる思いで月光の庭をさまようシーンは、やがて生まれる子供の悲劇的運命を痛切に象徴している。⁽⁶⁾ こうして両親のはげしい葛藤のうちに、しかもどうしようもない肉のむすびつきから、歓迎されざる子として生まれた赤ん坊には、出生の悲運を知っているような肩のしわと眼の暗さがあった。

Mrs. Morel looked down at him. She had dreaded this baby like a catastrophe, because of her feeling for her husband. And now she felt strangely towards the infant. Her heart was heavy because of the child, almost as if it were unhealthy, or malformed. Yet it seemed quite well. But she noticed the peculiar knitting of the baby's brows, and the peculiar heaviness of its eyes, as if it were trying to understand something that was pain. She felt, when she looked at her child's dark, brooding pupils, as if a burden were on her heart.

モレル夫人は彼を見おろした。彼女は夫にたいする自分の気持から、この赤ん坊を悲劇的破局のように恐れていた。そして今彼女の赤ん坊にたいする気持は奇妙であった。彼女の胸はこの子ゆえに、それが病弱であるか不具であるかのようにかかった。しかしそれはまったく元氣そうにみえた。しかし彼女は、独特の赤ん坊の眉根のしわと目もとの暗をにきびいた。あたかもそれはなにか苦しいことを悟ろうとしているかのようであった。彼女はわが子のくらく沈んだ瞳をみると、自分の胸に重荷がかかっているように感じた。

母はこの子を生んだことは夫婦の罪であると感じ、それだけにこの子にはげしい愛着をいだき、罪の償いをし
てやらねばと思ふ。

In her arms lay the delicate baby. Its deep blue eyes, always looking up at her unblinking, seemed to draw her innermost thoughts out of her. She no longer loved her husband; she had not wanted this child to come, and there it lay in her arms and pulled at her heart. She felt as if the navel string that had connected its frail little body with hers had not been broken. A wave of hot love went over her to the infant. She held it close to her face and breast. With all her force, with all her soul she would make up to it for having brought it into the world unloved. She would love it all the more now it was here; carry it in her love.

彼女の腕のなかにその虚弱そうな赤ん坊はいた。その濃い青色の眼はたえずまばたきせず彼女を見あげていて、彼女の胸の底の思いを彼女から吸いだすかとおもわれた。彼女はもう夫を愛していなかった。彼女はこの子の生まれることを望んでいなかったが、いまその子が腕のなかにいて、自分の心をひいている。彼女はこのひよわな小さな身体を自分のそれに結びつけていたへその緒がぎれていないように感じた。幼児への熱い愛着の気持がどっと彼女の全身を走った。彼女は子供をひたとわが顔と胸に抱きしめた。力のあるかぎり、全霊をうちこんで、この子を愛さずしてこの世に生んだ償いを

してやろう。今ここに生まれてあるからには、それだけいっそう愛してやろう。愛情のうちに育ててやろう。

彼女はこの子の将来がどうなるだろうかと案じつつ、直覚的にポール (Paul) と名づける。これは筆者の私見であるが、この名には使徒パウロへの連想があるのではないかと思われる。使徒パウロが主のために殉教したのとおなじく、ポールは生まれながらに悲劇の運命をもった「性の十字架を負わされた人」(“a sex-crucified man”)⁽⁹⁾であったのである。

ポールの誕生後も夫妻の葛藤はつづく。夜おそく酔っぱらって帰る夫と妻のあいだにはげしい口論がかわされ、しばしば暴力がふるわれた。ロレンスの初期の詩『幼いころの騒音』(“Discord in Childhood”)にもうたわれているように、子供たちは寢室で不安と恐怖に身をかくして、風音にまじってきこえる階下の両親の争いに耳をすますのであった。夫の投げた食卓の抽出して傷ついた妻の血が、抱かれています。ポールの白いショールを染め、さらにその髪を浸すシーンは、両親の葛藤とそれが子供におよぼす影響を象徴的に示している。もっとも争いの合間には、夫が機嫌よく家庭の手仕事をしたり、子供に話をして笑わせたりするなごやかな一時もあった。そういう時の彼はいかにも潑刺と楽しそうであった。このように無邪気で単純な彼が知的な妻に圧倒され、酒におぼれて破滅してゆく姿には一種のあわれが感じられる。いまや第三章「モレルを棄ててウイリアムをとる」(“The Casting off of Morel—The Taking on of William”)の題名が示すとおり、妻の関心は夫をはなれ、長男ウイリアムにそそがれるようになっていた。彼女は子供によって、夫によって充たされなかった精神的愛情を満足させようとしたのである。彼女は夫によって裏ざられた期待を子供にかけた。自分から生まれた子供によって、自分が社会でなしえなかった仕事をしてほしかった。そこにこそ「男の母」たる欲びと希望があったのである。ウ

イリアムは、「戦場で彼女の愛顧のしるし (“favour”) をつけて闘う騎士のよう」であった。彼女は、夫が他人の告げ口を真にうけてウイリアムを打とうとするのに断乎抵抗し、夫が彼に自分の職をつがせるといふのに反対し、息子が夫の二の舞をふまぬようダンスにゆくことを好まない。そうした母の願いにこたえて彼は優秀な若者に成長し、やがてロンドンに年俸一二〇ポンドの職を得て上京する。

ウイリアムの上京は当然のこととして、次男ポールと母との関係をより近づける。第四章「ポールの若い生活」(“The Young Life of Paul”)では、子供たちのきのこ狩り、黒すぐり狩り、ポールの気管支炎、ウイリアムのクリスマスの帰省などきわめて郷土色ゆたかな家庭的エピソードをとおして、母と子供たち、特にポールとのつよい共感が描かれる。いまや父は完全に閉めだされ、子供たちの愛情は母ひとりに集中する。その理由が、虐げられた母への同情にあったことはいままでもない。とりわけポールは母の気持に敏感で、母の苦しみに平静ではいらなかった。

It hurt the boy keenly, his feeling about her that she had never had her life's fulfilment: and his own incapability to make up to her hurt him with a sense of impotence, yet made him patiently dogged inside. It was his childish aim.

母が生活でけっして満足をえていないというこの気持が、痛いほどこの少年を苦しめた。そして自分にそれを償ってやる力がないことが、彼を無力感でくるしめた。が、心中どこまでもやるのだというかたい決心を起させた。それが彼の子供らしい目的であった。

この充たされざる母への同情と、自分がそれを償ってやらねばというたまらない気持、これがポールの母への愛情のすべてである。それは自然で単純な感情ではなく、ある意味では十分に強いられた、根のふかい意志的感情である。したがって、それはおとなになって恋人ができれば消滅するようなものではなく、母のこの世にあるかぎり宿命的につづくものであった。

第五章「ポール人生に乗出す」(‘Paul Launches into Life’)であつかわれる主な事柄は、父の坑内での負傷とポールの就職であるが、この二つの出来事をおして母とポールとの共感はずますます深まってゆく。父の入院中ポールは母のよい相談相手となり、彼女は彼にすべてを話して相談する。「いまやぼくは一家の主人だ。」と彼は得意げにいう。彼が母につきそわれてノッティンガム市へ就職の面接をうけにゆくシーンでは、二人のあいだにまるで恋人同志のような感情の交流がみられる。かくて、今では家へすこしの送金もせず、恋人にたくさんの金を使っているらしいウイリアムへの失望とともに、家から通勤し、わずかながらも毎週金を入れるポールが、兄にかわって物心両面で母の大きな支えとなるにいたるのである。

第一部をしめくくる第六章「一家における死」(‘Death in the Family’)はこの小説のターニング・ポイントで、三つの点で重要である。第一に、ウイリアムの死の遠因ともいえる女性関係は、霊肉の分裂という意味で、あとにつづくポールの悲劇の象徴的予示である。第二に、悲劇の因となるリヴァース(Leyvers)家への最初の訪問がおこなわれ、ポールがはじめてミリアムに会う。第三に、ウイリアムの死によって、母の愛と期待は以後ポールに集中する。

まずウイリアムと彼がロンドンで知りあう娘リリ(Lily)との関係は、あきらかに霊肉の分裂を示している。彼は二度ばかり彼女をつれて帰郷するが、そこで示される彼女は、身をかざることには関心がなく、教養も信

念もなく、おしゃべりと恋のささやきしか知らぬはずは娘である。ウイリアムは母に、時にはリリを前にして、彼女が本を読めないこと、堅信札 (confirmation) を三度もうけたこと、経済観念がまるでないことなどを、憎しみにちかいにがにがしい侮蔑的な口調でうちあげ、自分が死んだら彼女は三カ月で自分のことなど忘れてしまおうだろう、一度たりとも墓まいりに来ることはないだろうという。あきらかに彼は精神的には彼女を蔑み憎んでいるのだが、肉体的にはそんな彼女を棄てることができないのである。「はなれているときにはなんとも思わない。二度と会わなくともなんとも思わないだろう。だが夜などいっしょにいると堪らなく好きだ。」という彼の言葉が、二人の関係の異常さを明白に物語っている。二人の結びつきは肉体面においてのみで、精神的なつながりは全くない。ウイリアムの精神的よりどころはどこにあるかといえは、いうまでもなく母にである。彼は魂を母にあずけ、リリには肉体の満足のみを求めたのである。こうして分裂にくるしむ彼は、結婚費用を貯めるための過労もくわわってしだいにやつれ、表情に苦悶と絶望の色を深めてゆく。そして十月はじめにひとり帰郷した直後、ロンドンの下宿で、駆けつけた母にみとられて急逝する。彼の死はまさしく霊肉の分裂による悲劇の象徴であり、ポールの運命を暗示するものといえる。ただウイリアムのばあいは、リリが肉体的愛情のみに甘んずる女であったゆえにその苦しみは主として彼ひとりのもので、母とリリとのあいだに葛藤は生じなかった。母は期待する息子が女のために苦しんでいるのに心をいたためにも、その精神的よりどころが自分にあることに、エゴイステイックな安心をいだきえたからである。ところがポールのばあいは、ミリアムが精神面で彼の愛を母とじゅうぶん争う力をもっていただけに、彼をめぐる母と恋人との葛藤ははげしく、その悲劇はウイリアムのばあいよりもはるかに複雑かつ深刻となるのである。

ポールが母につれられてウイリ農場 (Willey Farm) のリヴァース家をはじめて訪れるエピソードは、ウイリ

アムの恋人といっしょの第一回の帰省と、第二回目のそれおよび彼の死とのあいだにはさまれている。兄の女性関係がしだいに悲劇的色合いを深めつつあるのと並行して、弟のおなじ悲劇の幕があくのみだから、この組立てはきわめて効果的である。またその動機がポールの意志に出たものでなく、母が彼の気を晴らそうと連れだしたということになっている点にもアイロニーが感じられる。このエピソードでは、農場の牧歌的な自然を背景に、彼らとリヴァース一家とのなじやかな交歓が描かれるのみで、ミリアムもはじめて姿をみせるけれど、もちろん誰ひとりとして今後彼らの巻きこまれる悲劇的運命を知るものはない。夕月をのぞみながら家路をいそぐ母子は、幸福に酔いしれている。

ウイリアムの死後母はふかい悲歎にくれるが、その身を案ずるあまりポールが重い肺炎にかかり、生死のさかいをなまよつにおよんで、「死んだものよりも生きているもののかことを考えるべきだった」と悔いて、けんめいに看病する。

Paul was very ill. His mother lay in bed at nights with him; they could not afford a nurse. He grew worse, and the crisis approached. One night he tossed into consciousness in the ghastly, sickly feeling of dissolution, when all the cells in the body seem in intense irritability to be breaking down, and consciousness makes a last flare of struggle, like madness.

“I’ll die, mother!” he cried, heaving for breath on the pillow.

She lifted him up, crying in a small voice.

“Oh, my son—my son!”

That brought him to. He realized her. His whole will rose up and arrested him. He put his head on her

breast, and took ease of her for love. (3)

ポールの容態はひじょうに悪かった。母は夜ごと彼につきそって寝た。附添婦を備えなかったからである。彼の容態は悪化して危機がちかづいた。ある夜彼は、体内の全細胞が崩壊せんと極度にいらだち、意識が狂ったように最後の抵抗をする、あの恐ろしいぞっとするような死の思いに意識をとりもどした。

「ぼくは死にます、母さん！」と彼は枕のうえで喘ぎながら叫んだ。

彼女は低声で叫びながら彼を抱きおこした。

「おお、わたしの子供、わたしの子供！」

それを聞いて彼は我にかえった。彼は母の姿に気づいた。彼の全意志がたちあがって彼をとらえた。彼は頭を彼女の胸に置き、遠慮せずその愛に甘えた。

マリ (John Middleton Murry) はこのシーンに註をしてつぎのようについて、「これはおそらく痛切で、おそらく間違ったことである。このような方法でこのような努力を強いられるぐらいなら、少年は死んだ方がましだといえるぐらいだ。彼は母にたいし完全に意識して、成人した男が愛する妻にたいして感ずるすべての感情を *めいじやうまごめ* じられてゐるのだ。」 (“It is terribly poignant, and terribly wrong. Almost better that a boy should die than have such an effort forced upon him by such means. He is called upon to feel in full consciousness for his mother all that a full-grown man might feel for the wife of his bosom.”) たしかにマリのいうとおり、ポールは母との異常な関係によって「精神的に早熟な」少年につくられていたのであって、母にたいする彼の感情は、成人した男が恋人によせるそれに等しかったといつてよからう。こうして彼の病氣を

契機に、母子のあいだに温い共感が前よりもつよくよみがえり、以後母の生活は、ウイリアムにかわってポールに「根をおろす」こととなる。ポールの叔母がいうとおり、彼の病気は「母を救った」のである。

第二部ではいよいよ、ポールをめぐる母と恋人の葛藤と、あいだにはさまれた彼の苦悶が主題となる。第七章「若者と少女の恋」(‘Lad and Girl Love’)では、ごく自然な精神的共感に発した少年少女の素朴な愛が、性的めざめとともにしだいに縛られたくらしいものとなってゆく過程が描かれる。ポールは美しいウイリ農場の自然と、そこに住むリヴァース一家をこよなく愛し、第二のわが家のように足しげく出入りするようになる。この一家には、はりつめた彼じしんの家庭とは異った空気があり、また彼のすぐれた天分を認め、はげますところがあつた。とりわけシリムムにおいて、彼は自分の最もよい理解者を見出したのである。自分の教養のひくさを歎き、兄たちの粗野を蔑み、精神的に高いものに憧れてやまぬこの少女は、ポールと文学や芸術を語り、彼のかく絵をじゅうぶんに評価するだけの力をもっていた。

He was conscious only when stimulated. A sketch finished, he always wanted to take it to Miriam. Then he was stimulated into knowledge of the work he had produced unconsciously. In contact with Miriam he gained insight; his vision went deeper. From his mother he drew the life-warmth, the strength to produce; Miriam urged this warmth into intensity like a white light.

彼は刺戟をうけてはじめて意識するのであった。スケッチが一枚できあがると、いつも彼はそれをシリムムのところへ持っていくことを欲した。そうして彼は刺戟されて、自分が無意識につくりだした作品を理解したのである。シリムムと

の接触によって彼は洞察力を得た。彼のものの見方は深くなった。母から彼は生命の熱、製作する力をひきだした。ミアムはこの熱を白熱の光のように強裂なものとしたのである。

彼にとって彼女は、自分の思想を練りきたえる無二の「かなとこ」(“anvil”)であり「脱穀場」(“threshing-floor”)であり、彼女との精神的共感はなくはならぬものとなった。彼は彼女に代数やフランス語を教え、いっしょに本をよみ、宗教や芸術を語り、つれだつて自然の美をもとめ歩いた。彼女のほうも彼の並ならぬ天分をみぬき、彼とのまじわりに生の充実を感じた。このように、彼らの関係はウイリアムのばあいと逆に、精神的な共感にはじまったのであつて、ここに悲劇の大きな原因があつたのである。またミアムが、スピリチュアルという点でモレル夫人と多分に共通した性格の女であつたことも、宿命적であつたといえよう。彼女はリリとちがつて、ポールの精神的愛情をモレル夫人とりつぱに争い、むしろ凌駕するだけの魅力をそなえていた。自然ななりゆきとして肉体的愛情がともなえば、彼女は彼を完全に母の手から奪いさるであらう。母はもはやウイリアムのばあいのように、息子の要所をつかんでいるという確信に安んじているわけにいかない。モレル夫人がほとんど宿命的にミアムを嫌い、息子との交わりをさまたげようとするのは、この恐怖を感じているからにはほかならない。彼女の恐怖はつぎの言葉に明らかである。

“She’s not like an ordinary woman, who can leave me my share in him. She wants to absorb him. She wants to draw him out and absorb him till there is nothing left of him, even for himself. He will never be a man on his own feet—she will suck him up.”

「あの娘は、あれにおけるわたしの持分をのこしてくるような、ふつうの女ではない。彼女はあれを吸いつくそうと思っている。あれにとってさえ、あれのなにも残らないほどに、あれを吸いだし吸いつくそうとしているのだ。あれは自分の足でたつ一人前の男にはなれないだろう。彼女はあれを吸いあげてしまおうだろう。」

かくて、二人の交わりが深まるにつれ、彼女は息子に不快の感情をしめし、妹娘アニー (Annie) とともにミリアムにひやかな態度をとりはじめる。結婚のあてもないのに若い男女が夜おそくまで二人きりであるのはよくないと咎める母と、ただ話しあうことのどこが悪いと反論する息子とのあいだに、にがい口論がくりかえされる。ミリアムは自分をむかえるモレル家のひやかな態度に耐えきれず、週一回の訪問をやめねばならなくなる。ポールも母の考えかたを不満としつつも、その拘束を意識せずにはおれなくなる。

一方自然のなりゆきとして、二人のあいだにはしだいに性の意識がめざめてくる。特にポールのばあいそれが顕著であった。その現われの最初は、ある夏の夕二人が町の図書館からの帰途、ミリアムがポールに見せたいという野ぼらの茂みへ案内する場面である。月光にうつくしく照らされて芳香をはなつ野ぼらの茂みを前に、二人のあいだには微妙な熱っぽい感情の交流がみられる。しかしけっきょく彼は、心のくるしさを覚えるかのように顔をそむけてしまわねばならない。彼の心にはあきららかに抑制がはたらいており、それが彼らが自然な愛の行為にうつるのを妨げたのである。彼は、二人は恋人ではなく単なる友だちであると、自分にも彼女にもくりかえしいきかせる。彼の背後にはつねに母があり、母を苦しめたためには二人は恋人であってはならず、そのためには、その関係は性の意識のまじらぬプラトニックなものでなければならなかったのである。

He would not have it that they were lovers. The intimacy between them had been kept so abstract, such a matter of the soul, all thought and weary struggle into consciousness, that he saw it only as a platonic friendship. He stoutly denied there was anything else between them. Miriam was silent, or else she very quietly agreed. He was a fool who did not know what was happening to himself. By tacit agreement they ignored the remarks and insinuations of their acquaintances.

“We aren't lovers, we are friends,” he said to her. “We know it. Let them talk. What does it matter what they say?”

彼は彼らを恋人であると思いたくなかった。彼らの親しさはひじょうに抽象的で、精神面の問題で、概念的な意識的努力であつたので、彼はそれをプラトニックな友情としかみていなかった。彼は、彼らのあいだにそれ以外のものがあることを断乎否定した。シリウムは黙っているか、あるいはごく静かに同意した。彼は自分になにが起りつつあるかを知らぬ愚かものであつた。暗黙の同意によつて、彼らは二人の間柄についての言葉やほのめかしを無視した。

「ぼくらは恋人じゃない。友だちだ。」と彼は彼女にいった。「わかつているわ。なんとも言わせておきましょうよ。みんながなんといおうと構やしないわ。」

しかしそうした努力は不自然であり、若い体内にめざめてくる欲求は自然であつた。それを抑えることは、本能と意識の闘いにほかならず、歪曲による性への異常な潔癖と、耐えがたい苦悶をもたらさずにはおかなかつた。

Then, if she put her arm in his, it caused him almost torture. His consciousness seemed to split. The place where she was touching him ran hot with friction. He was one internecine battle, and he became cruel to her because of it.

そうして彼女が腕を彼の腕にすべりこませると、彼はほとんど苦痛を感じた。彼の意識は分裂するかに思えた。彼女に触れられている箇所はその接触でかっとほてった。彼は血みどろの闘いを演じていた。そして彼はそのゆえに彼女に辛くあたった。

モレル一家が親しい人たちとメイブルソープ (Mablethorpe) へ二週間の休暇にいったときのある月光の夜、二人が海辺を散歩しての帰り、ポールはミリアムに接吻したい衝動につよく駆られるが、行動できない。「男が女をもとめるように彼女をもとめるという事実が、彼においては恥しいこととして抑えつけられ」、「この純潔ゆえに最初の接吻すらもはばまれた」のである。なぜ彼は、愛しあう男女に自然な行為を恥しいと考え、自制せねばならなかったのか。それは彼が、母のこの世にあるかぎり、完全な意味でミリアムを愛することができないことを感じていたからではなからうか。彼らの関係は、「前もって愛というものを除外した友情」(“a friendship in which love was ruled out in advance”⁽⁶⁸⁾)でなければならなかった。したがって、愛情の自然な結晶としての性の行為も当然避けられねばならなかったのである。彼らの精神的な交わりはふつうなら愛情に成熟しえただあろうけれど、不幸にも母の抑制によって「蕾のうちに虫ばまれ」(“was cankered in the bud”⁽⁶⁹⁾)、胎内でひねりつぶされた(“the slaughter of the foetus in the womb”⁽⁷⁰⁾)のである。自然な欲求と不自然な抑制とのたたかいになやむポールは、こうしたばあい狂ったように興奮し、自分でもわけのわからぬことをいって、はげしくミリアムを責めのをしたのであった。

第八章「愛における闘い」(‘Strife in Love’)と第九章「ミリアムの敗北」(‘Defeat of Miriam’)では、息子をめぐる母と恋人の闘いがさらに激化し、ついにミリアムがやぶれてゆく過程が描かれる。母と恋人のあいだ

にはさまれたボールの苦悩は、ますます深刻になってゆく。彼の心がミリアムにひきつけられるのは自然であり、彼女にあえげ性の欲求を感じずるのも無理からぬことであつた。しかし彼は、自分が彼女と親しくなれば母を苦しめることを意識せねばならなかつた。母を思うとき彼の心はみだれ、引裂かれた。彼はいつそう性の問題に過敏になり、狂つたようにミリアムにつらく当り、自分が自然な愛の行為にすすめないのは、彼女の過度な処女性性のせいだといひ、彼女は自分そのものを愛してはならず、そのなかの精神的なものだけを求めているのだと責める。スピリチュアルな女のつねとして、彼女が性の問題にかなり神経質であつたことは察せられるが、このばあいボールが責任を彼女になすりつけている印象は避けられない。現に彼じしん責任が自分にあることを認めているのである。たとえばミリアムが、あなたはわたしにあなたそのものを求めよというが、いつそうさせてくれたことがあるとはげしく反駁すると、彼は「それじゃ悪いのはぼくだ」と答えて言葉をにごしてしまふ。また彼は、「自分が彼女に接吻できるためには自分からなにかを追いださねばならぬ」ことを知っている。すなわち彼じしん、母の生きているかぎりほかの女に完全な愛をあたえることができないことを知っているのである。みづからも苦しみ、ミリアムを苦しめている異常な関係の原因が自分であり、その背後にいる母にあることを感じとっているのである。それだけに、それを認めまいとしてミリアムに責任をなすりつけながら、彼の心は自分の論理の矛盾にやりきれぬ空しさを感じていたのであろう。自分ゆえに罪もない彼女をのしり、苦しめている。しかも自分にはそれをどうすることもできない。たけり狂えば狂うほど、自己の矛盾に責められずにはおれない。成年に達しながら母の絆にしばられて、人なみに恋をすることさえできぬわが身の不甲斐なさを思いしらされずにはおれない。彼は自分から女を愛することができず、女にあわれみを乞うしかないのである。これは一人前の男性にとって、屈辱感無力感を感じさせる以外のなものでもない。彼が自分を「宙にういた」(“insubstantial”)

「ふたしかで頼りなく定まらぬもの」(“uncertain of himself, insecure, an indefinite thing”)と思わずにいられなかったのは、こうした自己にたいするやりきれない無力感によるものであっただろう。彼がミリアムにたくらるるのも、この無力感と屈辱感の裏がえしであり、「みじめな気持をかくす仮面」(“a mask for his own wretchedness”²³¹)にはかならなかつた。たとえば、母が市場へ買物に出たある金曜の夕、彼はミリアムにみせつけるかのように近所の娘ビアトリス(Beatrice)とぶざけながら、うしろめたい自責の想いかられずにはいられない。自分の無力を感じれば感ずるほどたけり狂う。たけり狂えば狂うほど自分の空しさにさいなまれる。これは果てることのない悪循環の袋小路であつた。

ところでここで、彼の母へのこの強いつながりが自然な感情に出たのではなく、母によって強いられたものであることを、もう一度指摘しておく必要があるだろう。彼の心がミリアムにひかれていたのはふつうの若者とおなじである。成年に達した以上、親のもとをはなれて自分の途をすすもうという意欲ももちろんあつた。しかしそれに対抗するものとして、母への感情があつたのである。そしてそれは、不幸な結婚生活をおくつた彼女へのつよい同情と、その償いをせねばという義務感に出たものであつた。前者が自然で本能的で前向きであるにたいし、後者はつくられた意識的な後むきのものであつた。その証拠に、先述の金曜の夜、市場から帰つた母とミリアムのことではげしく口論した彼は、けつきよく彼女を好きだけれど愛してはいないとくるしい弁解をして和解するが、そのあと床のなかで、自分がやはり母をいちばん愛していたことに心の安らぎをおぼえる。それは「あきらめの苦い安らぎ」であつた。彼がウイリ農場へむかうのは自然であり、ミリアムから母の胸にもどるのは「自己犠牲の満足」であつたのである。したがって時に母の拘束をにくみ、自我の独立を主張してはげしく抵抗することもあつた。しかし問題は、自然な感情が強いられたそれに抑えられ、前に進むべき意志が後に釘づけされたこ

とである。自己犠牲が苦痛であると同時にこのうえない欲びであり、そうせぬかぎり彼の魂が安らぎをえなかつたことである。ミリアムの存在にもかかわらず、彼にとって母こそ「唯一至上の存在」であり、彼女のある場所こそ「この世のなかで確固として、溶けて実体のないものとならない唯一の場所」であつたことである。たしかに、彼のとるべき途は二つに一つであつた。自然な欲求のまま恋人にはしるか、マリのいうように「聖者」(“a saint”)として「天国のための宦官」(“a eunuch for the sake of the kingdom of Heaven”)となるかである。当然彼は前者をえらばねばならなかつた。自我の独立をえるためには、断乎母を棄てねばならなかつた。しかし悲しいかな、それができなかつたのである。マリがそこにロレンスの宿命的よわさを認め、それを「母に苦しみをあたえることへの恐れ」(“the terror of inflicting pain upon her”)としてゐるのは正しい。ポールは自分の途をすすむことによって母を苦しめることに耐えなかつた。母の拘束をにくみながら、それに従う美德を棄てきれなかつたのである。マリはつぎのように言っている。「ロレンスの究極的悲劇はおそらく——彼の生涯は究極的になるしい悲劇だったのであるが——彼が自分の存在を決定する選択をなしえなかつたことである。最後まで彼は自分の美德を腹だたくし思いながらじっさいにはそれに従い、心のなかではそれを呪っていたのである。」(“Perhaps the final tragedy of Lawrence—and his life was finally a bitter tragedy—was that he could never make the choice on which his own integrity depended. To the end he resented his virtues, yet in act obeyed them, and in imagination blasphemed them.”) かくして彼は、母の絆と独立の欲求とはなまされて、のたうち、もがき、苦しまねばならなかつたのである。

いまや、ポールにとってこのどうしようもない苦しみをのがれる途は、精神面と肉体面をはっきり分け、純粋にセックスのみの満足に没入することであつた。性の満足の極致に達することによって、現実の苦悩を忘れるこ

とであつた。彼は、人間の理性も感情も忘我の深淵に押しながす、そうした性の神秘を信じようと願つたのである。しかし、このような愛情を除外したセックスのみの満足をミリラムにもとめることはできなかった。母の不幸が身にしみた彼は、結婚のあてもなく彼女の処女性を犯すことに耐えられなかつたのである。

A good many of the nicest men he knew were like himself, bound in by their own virginity, which they could not break out of. They were so sensitive to their women that they would go without them for ever rather than do them a hurt, an injustice. Being the sons of mothers whose husbands had blundered rather brutally through their feminine sanctities, they were themselves too diffident and shy. They could easier deny themselves than incur any reproach from a woman; for a woman was like their mother, and they were full of the sense of their mother. They preferred themselves to suffer the misery of celibacy, rather than risk the other person.

彼の知っている多くの神経の鋭敏な人たちは、彼同様自分の純潔性にしばられ、ぬけ出ることができない。彼らは女にたいしてあまりにも神経質で、女を傷つけそこなうぐらいならむしうなしてすまそうと思つのである。彼らは、夫にひどく女としての神聖を踏みにじられた母の息子に生まれたために、自分までがあまりにも神経質で臆病なのである。彼らは、女から咎めをうけるぐらいならむしろ自分をおしころそうとする。女は母も同様であり、彼らの心は母のことで一杯だからである。彼らは他人の幸福をあやうくするぐらいなら、むしろ独身の悲哀をえらぶのである。

こうして精神的に彼女を棄てきれず、かといつて彼女によってはセックスの満足をうることかなわず、ジレンマになやむ彼の苦悩は深まる一方であつた。ついに彼は「ぼくは君を夫が妻を愛すようなふうには愛せないように思う」といい、また「君は尼だ」といって、彼女との交際をいちおうちぎることを申して、彼女もやむなく

了承する。

こうした時、ポールの身ぢかにあらわれた女性がクレアラ・ドーズ (Clara Dawes) である。彼女は夫のバクスタ (Baker) と別居し、婦人解放運動にくわわっており、ミリアムと対照的に肉体的魅力をもった女であった。ポールは最初ミリアムによって彼女を紹介されるが、ミリアムが彼の性の欲望をためすつもりで二人を自宅で引合わせて以来、彼女が彼のつとめている会社で働くようになったこともあって、二人の関係はミリアムとのそれと逆比例して、急速に接近する。既婚者という安心から母も二人の接近に反対せず、彼もミリアムにたいするよ
うな息ぐるしい責任感なしに、性の満足をもとめることができた。彼はミリアムには自分の魂をあずけ、クレアラには性の満足のみをもとめようと考えてる。

ところがポールは、クレアラから、ミリアムの求めているのは彼じしんであって、彼が思っているような「魂のまじわり」ではないといわれ、敢て純潔の抑制をおしきって、ミリアムとの関係の壁をやぶれるかどうか試そうとする。すなわち彼女をセックスの対象としてもとめることが成功するか試そうとするのである。これが第十章「ミリアムへの実験」(The Test on Miriam) である。しかしこの実験は失敗する。彼は彼女の犠牲的に身を捧げているような、真剣な愛の眼をみるたびに、彼女にたいする責任を感じて、彼の望む「人間性のまじらぬ肉欲」(“impersonality of passion”) に没入することができない。ミリアムが大叔母の家の留守にいったとき、ポールはそこを訪ねてはじめて肉肉関係をむすぶが、彼女を犠牲にした思いに責められて苦しむ。「彼がほんとに彼女とひとつになるためには、彼じしんと自分の欲望を捨てねばならなかった。彼が彼女をものにするには、彼女を捨てねばならなかった。」この矛盾が、不成功の実体を明白に示している。すなわち、彼が彼ののぞむ純粹に肉欲だけの満足をうるためには、邪魔になるミリアムという人格を忘れねばならなかった。彼女は一

個の性の道具でなければならなかった。しかし真の意味でミリアムという女性とむすばれるためには、肉欲のみをもとめるそうした自己を否定せねばならなかった。自分の不自然な性行為を否定せねばならなかったのである。人格を無視し、愛情を前もって除外した性関係は「暴行」(“a kind of violence”)にほかならず、ポールがミリアムを犠牲にしたと感じざるをえなかったのは当然である。彼は現実の苦悩を忘れるために女から「あれ」(“It”)のみを求め、彼女は愛する彼をすくうため、犠牲的にそれに応じたのであったからである。こうした性関係が、彼をすくうどころかますます苦しみに追いやるものであったことは当然である。彼は、彼らの関係が失敗だったことを確認する。

第十二章「激情」(“Passion”)および第十三章「バクスタ・ドーズ」(“Baxter Dawes”)では、ポールのクレアラ相手の憑かれたような肉欲の追求と、当然来たるべき二人の関係の破綻が描かれる。最初彼らははげしい欲望にもえ、互いに忘我の歓喜を経験する。彼は、全身をもえつくす性の満足に生の充実を感じ、くらい果てしらぬ無意識の深淵にすべてを押しながす「生命の洗礼」に、現実のいっさいを忘れたと信じた。しかし、しょせんそれは幻影にすぎなかった。つねに彼の前にあるのはクレアラ・ドーズではなく、一個の女にすぎなかった。彼女が抗議するように、彼のもとめているのは彼女ではなく「あれ」(“It”)であった。彼に大切なのは彼女とすこす夜の時間であって、昼間の彼女には関心がなかった。性の満足に我をわすれているとき以外のポールは、彼女から遠くはなれた存在であった。つねに彼の魂は、彼女以外の、彼女に理解できないあたりをさまようていた。彼女は、はげしい性の満足にもかかわらず、彼を自分のものにしえないことに気づきはじめた。彼がまったく孤独で、彼の魂がなにか耐えがたい苦悩に悶えていることをみぬいた。彼女はその苦しみがなかに起因するものをおぼろげに感じながら、そうした彼の苦悩を救うことを自分の使命と感じた。

“Don't ask me anything about the future,” he said miserably. “I don't know anything. Be with me now, will you, no matter what it is?”

And she took him in her arms. After all, she was a married woman, and she had no right even to what he gave her. He needed her badly. She had him in her arms, and he was miserable. With her warmth she folded him over, consoled him, loved him. She would let the moment stand for itself.

After a moment he lifted his head as if he wanted to speak.

“Clara,” he said, struggling.

She caught him passionately to her, pressed his head down on her breast with her hand. She could not bear the suffering in his voice. She was afraid in her soul. He might have anything of her—anything; but she did not want to *know*. She felt she could not bear it. She wanted him to be soothed upon her—soothed. She stood clasping him and caressing him, and he was something unknown to her—something almost uncanny. She wanted to soothe him into forgetfulness.

「将来のことはなにも聞いてくれるな」と彼ははじめな気持でいった。「ぼくには何もわからないんだ。いずれにせよ、この今だけぼくのそばにいてくれないか。」

そして彼女は彼を両腕に抱いた。けっきょくわたしは人妻で、この人の与えてくれるものさえ求める権利はない。この人はわたしをひどく求めている。いまこの人はわたしの腕のなかにいて不幸だ。彼女は自分の温かさで彼をつつみ、慰さめ、愛した。この今を今だけのことにして、と彼女は思った。

しばらくして彼はなにか言いたげに頭をもたげた。

「クレアラ」と彼はもたえるように言った。

彼女ははげしく彼を抱きよせ、手でその頭を自分の胸に押しつけた。彼女は彼の声にただよう苦悩のひびきに耐えられ

なかった。彼女は心のなかで恐れていた。この人にわたしのなにもかも与えよう、なにもかも。しかし彼女は知りたくはなかった。それに耐えられない思いだった。彼女は彼を自分の力で慰さめたかった。苦しみを癒してやりたかった。彼女は彼をしっかり抱きしめ、愛撫しながら立っていた。しかし彼は、彼女にわからぬなものか、ほとんど不気味なものかであった。彼女は彼を慰さめてなにもかも忘れさせてやろうと思った。

ここに彼らの関係は明白である。ポールはセックスによる苦悩からの救いをクレアラにもとめ、彼女はそれに応じたのである。事情は、ミリアムにたいするばあいとまったく同じであった。そしてそれはもとより眞の救済であるはずがなく、正しい男女の関係ではなかった。なにものをも押しながし、現実のいっさいを忘れさせる「巨大な生命の大波」にしばしの充足と安堵をえても、それはその場かぎりの逃避にすぎず、一夜あければ変らぬ現実が待っていた。一方、クレアラは当然のこととして一時の興奮にあきたらず、ポールを恋人として自分のものにしたく思いはじめた。しかし彼は夜以外はひとりいることを欲し、昼間彼女が抱擁や接吻をもとめるのをうるさがあった。彼女の自分への愛情がしだいにひたむきなものになりつつあることを感じ、愛というものに伴なうあの拘束を恐れたからである。女を性の対象としか考えぬ彼にとって、「愛というものは解放感をあたえるもので、拘束感をあたえるべきものではなかった」からである。こういうポールに不満を感じはじめたクレアラは、夫婦関係はかならずしもうまくゆかなかった夫ではあるが、バクスタはポールとちがって少くとも自分のものであったと思ひ、ポールとはいずれ別れねばなるまいと感じはじめた。彼らの性関係はしだいに機械的になり、うまくゆかなくなる。

ちょうどこのころ、モレル夫人がアニーの家で発病する。ポールはすべてを忘れて母の病床につきそう。彼女

の病氣は痛で、家族の手あつい看護にもかかわらず、病状はすすんでいった。しかも強靱なねばりをもった彼女の生命力はなかなか衰えず、病苦とたたかう苦しみよりは、側につきさうもの見るにしのびぬところであった。特にボールの苦しみは甚しかった。彼はやつれては、眼は狂おしくなっていた。彼は仲間たちとふざけ、クレアラに会うことによつて苦しみを忘れようとした。こうしたときの彼の行為には、彼女を恐れさせずにはおかぬ異常さがあつて、彼女は逃げだしたく思うのであつた。

“Take me!” he said simply.

Occasionally she would. But she was afraid. When he had her then, there was something in it that made her shrink away from him—something unnatural. She grew to dread him. He was so quiet, yet so strange. She was afraid of the man who was not there with her, whom she could feel behind this make-belief lover; somebody sinister, that filled her with horror. She began to have a kind of horror of him. It was almost as if he were a criminal. He wanted her—he had her—and it made her feel as if death itself had her in its grip. She lay in horror. There was no man there loving her. She almost hated him.

「ぼくを抱いてくれ。」彼はそれだけ言つた。

ときどき彼女はそうした。しかし彼女はこわかつた。彼が彼女を抱いているとき、そこにはなにか彼女を尻ごみさせるようなところ、なにか異常なところがあつた。彼女は彼を恐れるようになった。彼はきわめて静かであつたが、きわめて異常であつた。彼女はいま自分のそばにいない、この見せかけの恋人のうしろに感じとれる男がこわかつた。それは不気味で、彼女を恐怖でみたすものであつた。彼女は彼に恐怖のようなものをいだしはじめた。それはほとんど彼が犯罪者であるかようであつた。彼は彼女をもとめ、彼女を抱いていた。しかし彼女はあたかも死神に抱きすくめられているよう

に感じた。彼女は恐れながら臥っていた。そこには彼女を愛する男の姿はなかった。彼女はほとんど彼を憎んでいた。

これが愛を除外した性関係の悲惨な結末であった。ポールははたして苦悩から救われえたであろうか。いやむしろ、彼はさらに深い泥沼にひきこまれただけであった。彼がすがった性の歓喜による忘却も、しょせん空しい幻影であり、彼の苦悶を根元的に解決するものではなかったのである。

やがて母は、その苦しみを見るにみかねてポールとアニーが飲ませた過量のモルフィネによって、ついに息をひきとる。ポールは支えをうしなつて、「人生に空洞があいて……そこから生命がじょじょに流れだし、死の世界にひかれてゆく」ような虚脱を感じる。しかし彼を支え、彼をくいとめてくれるものは誰ひとりいない。クラアは、彼がほしいものだけを得ると自分を夫の手に返した卑怯さを責めながら、けっきょくほっとした思いでバクスタのもとへ帰るのである。これで第十四章「解放」(The Release)は終る。

母の死後、ポールにとってはすべてが空しかった。絵をかいても、街を歩いても、新しく咲いた花をみても、その意義が感じられなかった。自分が生きていることさえ空しかった。実感をもって感じられるただひとつのものは、彼の胸に生きている母の想い出だけであった。彼は夜の街をあちこちとさまよひ、酒場の女にふざけ、トランプや玉突きに虚無感をまぎらわせた。

The reallest thing was the thick darkness at night. That seemed to him whole and comprehensible and restful. He could leave himself to it. Suddenly a piece of paper started near his feet and blew along down the pavement. He stood still, rigid, with clenched fists, a flame of agony going over him. And he saw again the sick-room, his mother,

her eyes. Unconsciously he had been with her, in her company. The swift hop of the paper reminded him she was gone. But he had been with her. He wanted everything to stand still, so that he could be with her again.

最も実在性をもってみえるのは、夜のこい闇であった。それは彼に完全で、すべてを包むごとく安らかにみえた。それに彼は自分をゆだねることができた。とつぜん一片の紙きれが彼の足もとから舞いあがり、鋪道を風に漂うていった。彼はこぶしを握りしめ、じっと身うごきせず立っていた。燃える苦悶が彼の全身をつつんでいた。彼はふたたびあの病室を、母を、母の眼をみた。無意識のうちに彼は母のそばにいて、母と語っていたのだった。紙きれがさっと飛んで、彼は彼女がこの世にないことを想いだした。しかし彼は彼女のそばにいたのだ。彼はすべてのものが静止して、もう一度母のそばにおれることを望んだ。

彼には依然母の想い出がつよく生きていて、彼は母のあとを追いたいという衝動に駆られた。しかし生きねばならぬと命ずる意志の声もあった。彼は生と死のあいだをゆきつもどりつした。こんなある夜、教会でミリアムを偶然みかけた彼は、彼女に救いの最後の望みを托すが、やはり彼女には彼を救うことはできなかった。彼女は彼が求婚してくれるのを望んでいるのに、彼にはそうしたイニシァティヴをとることができなかったのである。こうして彼女と別れたあと彼はなおも夜の闇をさまようてゆく。

And his soul could not leave her, wherever she was. Now she was gone abroad into the night, and he was with her still. They were together. But yet there was his body, his chest, that leaned against the stile, his hands on the wooden bar. They seemed something. Where was he?—one tiny upright speck of flesh, less than an ear of wheat lost in the field. He could not bear it. On every side the immense dark silence seemed pressing him, so

tiny a spark, into extinction, and yet, almost nothing, he could not be extinct. Night, in which everything was lost, went reaching out, beyond stars and sun. Stars and sun, a few bright grains, went spinning round for terror, and holding each other in embrace, there in a darkness that outpassed them all, and left them tiny and daunted. So much, and himself, infinitesimal, at the core a nothingness, and yet not nothing.

“Mother!” he whispered—“mother!”

She was the only thing that held him up, himself, amid all this. And she was gone, intermingled herself. He wanted her to touch him, have him alongside with her.

But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly.

そして彼の魂は、母がどこにしようと彼女をはなれることはできなかった。いまや彼女は夜の世界に入ったのであって、彼も依然そのそばにいた。彼らはいっしょであった。しかし踏段にもたれている彼の身体があり、胸があり、木柵にかけている手があった。これらも無視できないなかであると思われた。自分はどこにあるのか。この、野原にまぎれた一本の小麦の穂ほどもない、小さな直立する一片の肉片は、彼はその思いに耐えられなかった。このささやかな火花のような彼を、四方から広莫たる闇のしじまが押しつぶして、死滅せしめるように思えた。しかも、無にひとしい存在ながら、彼は死滅することはできなかった。夜が星をこえ太陽のあなたにまで延びて、すべてはそのうちに呑みこまれていた。星も太陽も輝くわずかの砂粒にひとしく、このそれらすべてを蔽い、それらを脅えたちっぽけなものたらしめている闇のなかで、恐れのためきりきり舞いをし、たがいにしっかりと抱きあっていた。これだけのものも彼じしんも極微の存在であり、核心は無であった。しかしまったくの無ではなかった。

「母さん。」彼は囁いた。「母さん！」

彼女こそ、こうしたなかで彼を支えてくれる唯一の存在であった。その彼女が行ってしまった。どこかへまぎれてしまったのである。彼は彼女が自分に触れてくれ、自分をそばに置いてくれることを望んだ。

しかし、自分は屈しはすまい。きっぱり向きをかえると、彼は黄金色に照りはえる街の輝きむかって歩いていった。彼のごぶしは握りしめられ、口はかたく結ばれていた。あの闇の方へ、母のあとを追うことはすまい。彼はかすかにざわめきの聞える、輝く街むかって足はやに歩いていった。

これはきわめて印象的な最終章「うちすてられて」(Derelict)の幕ぎれである。ポールは絶望のはて生死の境をさまようが、ぎりぎりのところで決然生の世界めざして歩きはじめるのである。ムーア(Harry T. Moore)氏はこの点にカタルシスとしてのこの小説の意義をみとめ、最後の副詞“quickly”は“rapidly”の意よりはむしろ“livingly”の意ととるべきだと述べている。⁽⁸³⁾ いずれにせよ、ポールが過去をすてて未来めざして歩みだすところにこそこの小説の意義はあるのであって、先に引いた作者の梗概では最後「死へ漂いゆくままに残される」ことになっているのに、作品では生にむかって歩みだすのは意図と実際との矛盾だというような議論は、小さなあげ足とりのように思われる。ポールが生の世界に向ったと同様、ロレンスもこの作品によって過去を客観的に凝視し、過去の苦悩を洗いきよめ、新しい人生へ出発せねばならなかったのである。最後にこの作品にたいするフロイドの影響であるが、筆者は Hoffman (Frederick J. Hoffman) 教授とおなじく、ロレンスは妻フリーダ (Frieda Lawrence) をとおしてある程度精神分析の影響を受けたかもしれないが、それはあくまで表面的なもので、ここに扱われた根本問題は彼がフロイドを知らずと前にすでに存在したと考える。⁽⁸⁴⁾ ロレンスがフロイドの影響によって特に母子の問題と霊肉の分裂をつよく押出したのだとし、ポールのミリアムおよびクレアラと

の關係の失敗を、母の拘束と無關係だとするスピルカ氏の説は、筆者の採らざるべからざる。

(一九六四年七月)

〔註〕

- (1) Aldous Huxley (ed.): *The Letters of D. H. Lawrence*, pp. 76-7.
- (2) *Ibid.*, p. 77.
- (3) "Yes; but my mother, I believe, got *real* joy and satisfaction out of my father at first. I believe she had a passion for him; that's why she stayed with him. After all, they were bound to each other." *Sons and Lovers*, Kenkyusha, p. 425.
- (4) *Ibid.*, p. 22.
- (5) ロレンスが『息子と恋人』の「序文」として書いた文章のなかでも同じような考えを述べている。そこでは女を樂のなかにいる女王蜂に、男をそこへ帰って力を得、新しい自分に生まれかわってふたたび働きに出る働き蜂になどえて、同じした男女の關係が正しく行われないと共に破壊すると述べている。 Cf. *The Letters of D. H. Lawrence*, pp. 100-2.
- (6) ミリマムのキデスでロレンスの恋人ジェシイ・チャインブス (Jessie Chambers) の回想によれば、ロレンスの母は彼女に父のせうに語ったのだらう。"He (Lawrence) hates his father," she said. "I know why he hates his father. It happened before he was born. One night he put me out of the house... He's bound to hate his father?"
- (7) *Sons and Lovers*, p. 49.
- (8) *Ibid.*, p. 50.
- (9) J. M. Murry: *D. H. Lawrence; Son of Woman*, p. 21.

ふなすのレディニ云 “As his great namesake had said, ‘Whatever I do, I do it unto the Lord,’ so Paul Morel could have said, ‘Whatever I do, I do it unto my mother.’” (*Ibid.*, p. 29.) と語つてゐる。また小説のなかで兄のウイリアムがホーレスに “Postle” と呼ばる (*Sons and Lovers*, p. 75.) の事見のがせなう。

㉔ *Sons and Lovers*, p. 90.

㉕ *Ibid.*, p. 190.

㉖ J. M. Murry: *D. H. Lawrence; Son of Woman*, p. 30.

㉗ ロンヌスのチャムベーンズ (Chambers) 一家のハグズ農場 (Hags Farm) をうかに愛し、そのでの生活が彼の成長期にうかに大なる影響を与へたか、彼の処女作『白孔雀』 (*The White Peacock*, 1911) は、そのシホメイ・チャムベーンズの回想記 E. T.: *D. H. Lawrence; A Personal Record* に語らなむ。

㉘ *Sons and Lovers*, p. 213.

㉙ *Ibid.*, p. 260.

㉚ *Ibid.*, pp. 232-3.

㉛ *Ibid.*, p. 233.

㉜ E. T.: *D. H. Lawrence; A Personal Record*, p. 70.

㉝ J. M. Murry: *D. H. Lawrence; Son of Woman*, p. 34.

㉞ E. T.: *D. H. Lawrence; A Personal Record*, p. 69.

㉟ *Ibid.*, p. 160.

㊱ J. M. Murry: *D. H. Lawrence; Son of Woman*, p. 36.

㊲ *Ibid.*, p. 37.

㊳ *Sons and Lovers*, p. 374.

- ㉔ J. M. Murry : *D. H. Lawrence ; Son of Woman*, p. 32.
- ㉕ *Sons and Lovers*, pp. 472-3.
- ㉖ *Ibid.*, p. 518.
- ㉗ *Ibid.*, p. 549.
- ㉘ *Ibid.*, p. 562.
- ㉙ Harry T. Moore : *The Life and Works of D. H. Lawrence*, p. 105.
- ㉚ マーティン・シュローラ (Mark Schorer) 氏著作の矛盾を取らぬが、この作品に於ける意図と美意識の混乱を主張して居る。
- ㉛ Cf. Mark Schorer : 'Technique as Discovery' (William Van O'Connor (ed.) : *Forms of Modern Fiction*, p. 18.)
- ㉜ Cf. Frederick J. Hoffman : 'Lawrence's Quarrel with Freud' (Frederick J. Hoffman & Harry T. Moore (ed.) : *The Achievement of D. H. Lawrence*, p. 109.)
- ㉝ Cf. Mark Spilka : *The Love Ethic of D. H. Lawrence*, pp. 60-85.